

飛んで火にいる

いも

その日は巴の帰りが遅くて、心配になった俺は巴の通っていた小学校の跡地まで迎えに行った。

その日は運悪くも新月で、星明りも無い。貧乏な学校だったから、通学路に設置されていた数少ない街灯は壊れたきりで、蜘蛛の巣にまみれていた。俺は背中に冷や汗をかきながら、人影一つない、薄い紺色の空の中に浮き出た街を走った。

家から小学校まではこんなに遠かったか、といよいよ俺が焦った頃、俺の足元に巴の影が見えた。日暮れとはいえ、異様に伸びた巴の影を辿ると、そこに巴は立っていた。巴は引きつった顔をして、微動だにせず、ただ立っていた。

「巴……何やってんだ、こんな遅くまで。同窓会があったんじゃないかねのか？ 他の友達は？」

「蚩」

「今夜は新月だ。日が落ちる前に帰ってこいって言っただろ」

「蚩」

「帰るぞ」

「蚩、早く」

早く……なんだったのだろう。巴が言った、最後の言葉。「早く逃げて」だろうか。……俺は、「早く助けて」だったんじゃないかと思う。

巴がずっと俺の名前を呼んでいた理由に気づいたのは、ぼぼこと歪み、膨らむ巴の影が巴の全身を飲み込んだときだった。

影は一瞬で巴の体を舐めるように燃やし、巴を火達磨にしてしまった。真つ黒の影そのものになった巴は、黒い火を全身に纏って踊るように、四肢を振り回す。

この街には、ヒトカゲが出る。

十年前、この街……昔は家守町という名前だった……では、新薬開発プロジェクトが立ち上げられた。人間の皮膚を火に強くするとか、火傷しなくなるとか……そんな新薬を開発するという名目で開発プロジェクトが進められたらしい。その新薬の実験台には人間以外の多種多様な動物が使われた。動物達は全身に火をつけられても、体が黒くなるだけで毛皮も皮膚も眼球も、全くの無傷で生き延びられるようになった。順調に進んでいた新薬の開発だったが……その数いる実験台に含まれていた、一匹の蜥蜴に異変が現れた。

ある新月の夜、なんの変哲もない蜥蜴だったはずのその一匹は、研究員に火のついたマッチ棒を近づけられたとき、黒い体から同じく真つ黒な火を出した。その黒い火はマッチ棒を伝って研究員を火達磨にし、すぐに研究所全体を大火事にした。

通報を受けて駆けつけた消防隊にも、その黒い炎は消せなかった。結局、三日三晩勢いを落とすにつつ続いた黒い炎は、街

をほとんど全壊に追い込んでから消えた。

たくさんの人が死んだ。都会だったはずの家守町に乱立していたたくさん建物が灰になった。

研究所跡地には研究員の遺体が多数。行方不明が数名。……どういいうわけか、実験台の遺体は一つも見つからなかった。

一か月後には、廃墟や焼け跡で見つかった元実験台の動物達が町の各地で例の黒い火事を起こし、毎日、新聞を騒がせた。

元実験台達は火蜥蜴と呼ばれ、影や暗闇に文字通り同化して、近づいた生き物……特に人間を襲う。唯一苦手なのは月の光。だから新月の夜に感染者が増え、月光が強い満月の夜には、少しだけ感染人数が減る。そしてなぜか、この灰だらけの街の外には出ない。これが判明してすぐ、家守町は高い壁でぐるりと囲まれ、外の世界と隔離された。

そこからはよくあるゾンビパンデミックだ。火蜥蜴に襲われた人間も影のように真っ黒い火を纏う火蜥蜴になり、また人間を襲って仲間をつくる。本当にゾンビみたいに不老不死らしく、何も食わず、眠らず、ただ闇に紛れて黒い火を移して動き回る。いつしか火蜥蜴は人影になり、動物か人間か紛らわしくなったからヒトカゲになった。

この街に閉じ込められた人間は、機能しなくなった街の中を逃げ回り、ヒトカゲになるまでの時間稼ぎをして生きるしかない。金や権力を持っている奴は、賄賂か何かを使って壁

を越え、二度と街には戻らなかった。親父とお袋も、俺と巴を置いていったきり戻ってこなかった。また子どもだった俺には分からなかったが、親父は壁を越えるのに必要な金を二人分しか払えなかったのだろう。

俺と巴も、いつかは黒い火に焼き殺されるか、ヒトカゲになる。

……ただ、きつと俺が先にそうなるだろうと思っていた。

「巴」

なんでよりによって、今日なんだ。

十年ぶりに生き残っている友達と会うんだ、と黒焦げの玄関先で微笑んでいた巴。なんでよりによって、今日が巴の同窓会で、新月で、巴がヒトカゲになる日なんだ。

一度火が燃え移ったら、その人間はもう助からない。そのまま焼け死ぬか、ヒトカゲになつて永遠にゾンビのように動き回って仲間を増やす。もう人間に戻ることはない。

不思議と、巴の肩から俺の右手に燃え移った黒い炎は、熱くなかった。むしろ何の感覚もなかった。右手の感覚が一切無くなったらしい。巴が俺に手を伸ばす。もう意識が無くなっているように見えても、俺のことは覚えていたのかもしれない……と、思ったけれど。

ただ俺を襲っただけだったのだろう。巴の手が俺の右目に当たった途端、俺の視界が狭くなった。右目の視力が失われたらしい。その拍子に転んだ俺は、巴の視界に映らなくなっ

た。ヒトカゲは視力が弱い。もしくは目が全く見えていない。巴は俺が足元にいることに気づかなかつた。踵を返す巴に右手を伸ばそうとしたが、もう動かなかつた。巴を目で追おうとしても、巴の姿が赤く霞んでよく見えなかつた。見えているはずの左目に、左手を当てる。指先にべたりと血がついた。転んでコンクリートに頭を打つたのに、気づかなかつた。頭の中も、霞んでいった。

「で、気がついたらここにいた……と」

俺は日焼けしたシャツが掛けられたベッドに座つたまま、隣のパイプ椅子に腰掛けている男に頷いた。

「アンタ危なかつたよ。あんな道端で寝てちや、いつ燃やされたつておかしくなかつた。まあ気絶してたんだろうけどさ……偶然俺が通りかからなかつたら、今頃丸焦げだ」

二十代後半に見える男は、黒いウインドブレーカーを着ている。丈が合っていない。たぶん、中学生の頃に使っていたものを着ているのだろう。何より目を引くのは、肩に掛けた懐中電灯……のような、小学生の背丈ほどはある大きな筒だつた。

「ああ、これ？ これはヒトカゲ用の懐中電灯。この光を当てると、闇火……ああ、ヒトカゲの黒い火のことね、闇火が消えるんだ。アンタの右目と右手についた闇火も、これで消したんだよ」

俺は右目を、墨汁にでも浸したように黒くなった右手で触る

うとした。が、やはり右手は肩から指先まで、一切動かない。感覚がなくて、まるで右肩から先が木の棒になったようだった。

「あくまで消火できるつてただだから、残念だけど右手はもう二度と動かないし、右目も一生見えないままだよ」

男は耳を小指でほじくりながら言い添える。何一つ残念とは思っていないさうだった。

「月光をヒントに作られたものらしいけど、俺も詳しいことは知らない。俺達はこの懐中電灯を使って、ヒトカゲの駆除をしてる……いわば自警団つてやつ？」

「自警団……？」

男は慣れた様子で、作業しみた早口で説明する。

「ほら、こんな街だからさ。公式も非公式もないんだけどね。とりあえず、『電灯会』つて名乗ってるよ」

聞いたこともない、知らない団体名だった。

「『電灯会』……」

「そう。この懐中電灯を持つてるのが会員。この懐中電灯……俺達は月光電灯つて呼んでるけど……これは、どうやらここ、研究所跡地の地下、まあここで見つかった試作品らしくてね。ヒトカゲの大量発生前後に作られたことは確かなんだけど、数は少ないし、ヒトカゲにかなり近づいて、少なくとも十秒は光を当てないといけないから危険性も高い。結局、当時は実用まで至らず、この惨状つてわけ」

ヒトカゲに接近して、火が自分に燃え移るリスクを負つてま

でヒトカゲの駆除をしたいと思う奴なんて普通はいないだろう。ヒトカゲの数は計り知れないし、駆除する暇があったら自分の命を守るために逃げる。

電灯会の会員になりたがる奴なんて、きつと、よほどの命知らずなお人よしか、何もかもがどうしてもよくなってしまうかのどちらかだ。

「駆除したところで、街が持ち直すわけじゃないだろ……」
「その通り」

男は気を悪くする様子もなく、肩を竦めてそう言った。

「そりゃあ、街は今更どうにもならないと思うよ。月光電灯持ってたつて、ダメなときはダメだし。会員も何人かは燃えちゃったし、ヒトカゲになっちゃったのもいる」

「じゃあ、なんで」

「逃げ回るよりいいだろ。自分や周りの人が、少しでも、一日でも長く生き延びる確率を上げる」

男は一瞬だけ真剣な顔をした後、にこりと微笑んだ。

「大抵の人は断るんだけど……どうかな。アンタ、電灯会に興味ない？」

「なんで俺が」

「見ちゃったんだよ、あの女の子……巴ちゃんだけ、燃えてるあの子に手伸ばしてんの」

俺が口を閉じてても、男はまだ続けた。

「その右腕は、あの子に触られて火が移ったんじゃない。自分でやったんだろ。……アンタ、大胆なことするね。まさか、ヒ

トカゲになった人間がもう元に戻らないこと、知らなかったなんて言わないでしょ」

一度火が燃え移ったら、その人間はもう助からない。そのまま焼け死ぬか、ヒトカゲになつて永遠にゾンビのように動き回つて仲間を増やす。もう人間に戻ることはない。

分かっているのに、俺は巴に手を伸ばした。火が燃え移った直後ならなんとかして消せると思ったのか、巴がいなくなつて、俺だけこんな街に取り残されたつて仕方がないと思つたのか……。前者だと言おうとしたが、口が開かなかつた。舌すら動かさない。本当はどつちか、分かっていた。この男の前で取り繕おうとしても、声が裏返りそうだった。

「電灯会の会員になりたがる奴なんて、よっぽど命知らずなお人よしか、何もかもがどうしてもよくなっちゃった奴のどつちかだからさ」

心臓がどくりと跳ねた。男は童話に出てくる奇妙な猫のように笑つた。

「向いてると思うなあ、アンタみたいな人。アンタは死にたいんだろうけど、これもなんかの縁だと思つてさ。九死に得た一生を大事にするためになるもよし、正義のヒーローをやるためになるもよし」

黙つて足元に片方しかない目を落とす俺を見てか、男は一つ伸びをして、この病室のような部屋の、ドアがぶち抜かれた出入口に向かつていった。男の汚れたブーツがサッシを踏んだとき、俺はやつとこのことで口を開いた。

「アンタじゃない」

予想通り、声は裏返った。男は両手を頭の後ろに当てたまま、振り返る。

「蛍だ」

「……俺、ロウ。脳燃えてっからちよつとヘンジンだけど、よろしく。歓迎するよ、蛍くん」

ついてきて、と手招きされたので、ベッドから立ち上がるようにすると、遠近感がつかめなくてよろけた。

「アハハ、ダッセ」

腹が立ったから、「ロウさんも、そのパーマ頭ダセエよ」と言い返した。

「元はストレートヘアだったけど、燃えてからずっとこうなんだよ」

ロウさんはゲラゲラ笑いながら、俺に肩を貸してくれた。ほら、と縮れた前髪がかき上げられると、そこには黒い痣があった。脳が燃えた、というのは頭に火が燃え移ったということらしい。

「……ごめんなさい」

「ウケる」

ロウさんに連れられて、病室の外に出る。ここは地下二階らしく、闇火による損傷が少なかった。

「……ロウ、って、どう書くんだった？」

「忘れた。ロウってことだけ覚えてんだけどね。蠟燭の蠟ってことにしてるよ」

火を連想する漢字をわざわざ選ぶなんて、この街では縁起が悪い気がする。俺が微かに顔を顰めたのを見て、ロウさんはパーマ頭を指さしてまた笑った。

「ほら、俺つてのっぼだし、てっぺんが燃えたからさ、蠟燭みたいでしょ」

「……明朗の朗とかでいいんじゃない？」

「ああ、いいなそれ。それにする」
なるほど確かに、変わった人だ。

「そう……。また状況に混乱しているでしょうけど、気を強くもってね。貴方が今、生きていることにはきつと意味があるわ」

地上二階に上がつてすぐの、研究室跡の出入口には、研究室A-2と書かれた、溶けたプラスチック製の板が添えられていた。そこで待っていた四十手前くらいの女性は、俺の事情を聞いてため息をついた。

「貴方、蛍くんといったわね。今、幾つになるの？」

「今年で十八です」

「そんなに若かったの。ごめんなさいね、ずいぶん大人びて見えるから……。それじゃ、ここでは最年少ね」

女性はしばらく何か思いつめた表情をした後、戸惑いを隠すような曖昧な笑みを見せた。

「私は由紀子。夫はこの研究所に製品を売り込む仕事をしていて、それなりのお金持ちだったけれど……見ての通り、私

は壁の向こうには連れていってもらえなかったの。夫から月光電灯の噂を聞いたことがあったから、あの大火事の後にここにきてみたら……なんと本当にあつたわけ。私一人じゃどうにもならないから、人を集めようと思つてね。それで今に至るって感じかな」

「だから、由紀子さんが電灯会のリーダーつてわけ」

朗さんは、パチパチと手を叩いて口笛を吹いた。

「ロウさん……蛍くんが困つてる」

「え？ そう？ そんなことないでしょ。まあとにかく、そんなこんなで電灯会は由紀子さんを筆頭に、水道とか電気とかの運営と同様、有志が集まつてなんとかやつてるって感じかな」

実験用の机に腰かけて、両手を広げる朗さん。この研究室にいるのは、俺と朗さん、そして由紀子さんの三人だけだった。

「今は朝だから、人が少ないけど……暗くなってきたら、会員がここに駆除の報告をしに来たり、ヒトカゲが出やすい場所への見廻りグループを組みに来たりするの」

「といっても月光電灯が全部で十本しかないから、電灯を使用できる会員の上限も十人なんだよね。だからグループも少数」

由紀子さんは俺の右腕を見て、「電灯を使って駆除するのが怖かったり、難しかったりする人には、他のお手伝いに回してもらつてるのよ。蛍くんは、どうしたい？」と俺に聞いた。

「……俺は、駆除に回りたいです」

「巴ちゃんを探したい？」

「はい」

しばらくの沈黙。利き手が動かない俺に駆除を任せることに難色を示しているのかと思つたが、意外にも由紀子さんは「そうよね」と頷いた。

「……断られると、思つてました」

「それは……ごめんなさいね、正直に言うと、少し考えたわ。片手で電灯を操作するのは、慣れるのに時間がかかる。せっかく生き延びられたのに、すぐに死なせてしまうようなことになつたら、後悔しきれないもの」

俺が、「すぐに操作に慣れます」と言おうとすると、由紀子さんは「分かつてるわ」と笑つて、首をゆくりと横に振つた。

「でも、蛍くんにとつて一番大事なのは、自分が生きることじゃないやなくて、巴ちゃんを見つけることなのよね」

「はい」

「そうよね。私も、もう十年も娘のヒトカゲを探してるんだもの。蛍くんにも、偉そうにお説教できないわ」

由紀子さんはまた頷くと、研究室の奥にある、研究準備室に入つていった。

「いつてさ。ラッキーだね」

「……そうなのか？」

朗さんの言った通り、由紀子さんは月光電灯を重そうに抱えて戻ってきた。

「今、余つているのはこの一本だけなの。……歓迎するわ。会

員番号十番、蛭さん」

その月光電灯には、マジックペンで「大沢」という名字の書かれた長方形のシールが貼られていた。由紀子さんはそれを剥がして、新しいシールとマジックペンを朗さんが腰かけている机の引き出しから取り出した。

「ごめんなさい、嫌なもの見せちゃったわね。蛭くん、名字は」
「川島です。川島蛭……」

「そう。河川の川に、島国の島でいいのよね」

由紀子さんがマジックペンの先をシールにつけようとしたとき、「蛭」と書いてください」

俺はそう言い直した。

由紀子さんは顔を上げて俺を見たが、ただ頷いて、シールに一文字だけ書いた。

「なんで名字にしなかったの？」

今日の見廻りと駆除が終わって、研究所跡に報告しに戻る途中、朗さんは俺に、唐突にそう聞いた。さつき電灯の光を当てたヒトカゲが、炎を失ってもなお、俺達の後をつけてくる。「名字？ 何のこと？」

「ほら、いつだっけ……二週間前かなあ。その月光電灯に名前を入れるとき」

「一か月前だよ」

朗さんはその垂れ目を丸くした。

「もうそんなに経つのか。蛭くん、この活動に慣れるの早かつ

たから、あれから一か月も経つてなんて思えないな」

朗さんはそう言ってくれるが、俺はかなり朗さんに迷惑をかけたと思う。勿論、一日でも早く片手で月光電灯を操作できるように練習したが、最初の二週間の見廻りは、ずっと朗さんが俺の面倒を見てくれた。

それに、俺にとつてのこの一か月は、出口のない環状の道を歩かされているようだった。俺は他にすることもないから、毎日、巴を探しているが、一度も巴の姿は見えない。他の会員も見廻りのときに巴を探してくれているが、やはり巴を見かけた人はいない。この街の外には出られないのだから、街中を探せばすぐに見つかると思っていたが……そう簡単なことじゃないらしい。そうでなければ、由紀子さんの娘はとつてに見つかっているはずだ。

「それで、理由は？」

「あ、ああ……親が街の外に出て、ずいぶん経つ。家族の縁はもう切れたようなものだからな。今更、名字を使うのもおかしいだろ」

「ふーん、なるほど。じゃあ巴ちゃんって、蛭くんの彼女なの？」

「妹……」

「だよ。じゃあ、まだ家族の縁あるじゃん」

家族。巴は家族だ。それは間違いないことだけど、ヒトカゲになった人間からしてみれば、家族も何もないだろう。実際に、巴はもう俺を蛭だとは認識できないのだから。まだ「川島

「家という家族の枠組みに縋りつくのは、滑稽だろう。……でも、どうだろう。巴をもう家族だと思えないなら、俺はどうして巴を探しているんだ？ 由紀子さんが娘を探すのは、娘がまだ人間として生きているかもしれないから。でも、俺が既にヒトカゲになった巴をわざわざ探したところで、何になる？ ヒトカゲは見つけ次第、駆除して終わり。巴だってそうだ。探す手間を割くなんて、ただの無駄なんじゃないか。」

「あー、ごめんね。今の質問ナシ！ 傷つけようとして聞いたんじゃないんだ、ただ気になっただけ」

朗さんが気まずそうに、俺から目を逸らした。
「……俺も、気になる。今まで巴を探さなきゃいけないと思つてたけど……よく考えれば、探す意味なんてないのかもしれない」

一か月、行動を共にしているうちに、俺は朗さんのことが少しずつ分かってきていた。この人は確かに変わった人で、行動の意図が読めない。迂闊な発言で人を怒らせたり、困らせたりすることもある。でも、故意に人を傷つけることはしない。それは、見廻り中、壁の外からごく僅かに支給される携帯肉（外もこの街がダメになった弊害を受けているらしく、余裕はない。支給されるのは安価で製造されるといって硬い人口肉だ）を食べるとき、俺の分を千切ってくれたり、喘息をもつ会員の代わりに荷物を運んだりする様子を見ていれば分かる。

朗さんは俺の数歩先に駆けだし、俺の方に振り向いた。そ

の長い両手が、何かをばら撒くように広げられる。

「意味なんてさ、なくなつていいじゃん！」

「……そうかな」

「うん。由紀子さんの、まだどこかで生きてるかもしれない娘さんを探すっていう目的は、電灯会を続ける意味になつてよ。すごく、意味のあることだ。……でも、俺はそういう理由、なんにももつてないよ。何も覚えてられないからさ。俺の正義のヒーローごっこは無意味だ。……でも、この街で何もせずいたら気が狂う。目的とか意味とか分からなくても、やりたきややればいいんじゃない？ 蛍くん、妹を探して旅をする漫画やゲームの主人公みたいだ。色々な場所を巡つて手がかりを掴んで、囚われていた妹を助け出す。……かっこいいよ」

ね、と朗さんは笑った。俺は何も言えなかつたけど、せめて笑い返した。

「朗さんは、本当に明朗って言葉がよく似合う人になつたわ」

「……そうですか？」

研究室の定位置に座つた由紀子さんは、ゆつたりと頷く。

「蛍くんが来てから、少しずつ変わった。彼の名前、蛍くんが漢字を選んでくれたんでしょ？ 朗さんが言っていたわ。きつと蛍くんが明朗の朗、って言ってくれたのが嬉しかったのね」

俺は、報告を済ませるなりさつさと家に帰った朗さんと、半年前のあの日、初めて会った朗さんを思い出す。

「もともと、あんな感じだったと思うんですけど」

「少しずつ伸びていく前髪みたいに、ずっと一緒にいると、気づかないものなのかもしれないわね」

俺の視界では、くすくすと笑う由紀子さんの顔を、いつの間にか右目を覆い隠せるくらいに伸びた俺の前髪が覆っていた。

「これからも、朗さんのこと、よろしくね」

「世話になつてるのは……俺のほうです」

「蛍が、辞める？」

「そうなの……。今日の昼に、月光電灯を返しにくるつて」

いつもより早い時間に呼び出された朗さんは、私の言葉をまだ理解できていないようだった。

「なんでまた急に。やつこの活動や会員の皆に慣れてきたつて、この前言つてたばかりだよ。だいたい、巴ちゃんの搜索だつてまだ始めて一年経つかどうかつて」

「五番会員の日澤さんが、巴ちゃんを見つけたの」

朗さんの動揺が落ち着くまで待とうと思つていたけれど、これ以上答えを引き延ばすのは酷だった。

朗さんの全身が、石のように固まる。私もまだ、突然のことに内心動揺していた。

巴ちゃんが見つかつたと報告があつたのは、昨晚。蛍くんと朗さんが帰つた後、入れ違いに日澤さんが駆け込んできた。

巴ちゃんは、蛍くんの家から近い場所で見つかつた。偶然そこにいただけなのか、生前の記憶が微かにでも残つていたのかは、確かめようがない。

日澤さんの見廻りグループは、駆除後の巴ちゃんを近くにあつた電柱に縛り付けた。ヒトガタは人間と違つて、火を消しても、燃えた体の部位をこれまで通り動かせる。けれど、ヒトガタの身体能力は、生前の本人と変わらない。女の子の力で何重にも巻かれた縄を切つて逃げるのは不可能だと思ふ。蛍くんは月光電灯を返しにここに向かう途中で、蛍ちゃんを拾つてくると言つていた。

朗さんにそう伝えると、彼は一層拳を強く握つた。

「……それは、分かつたよ。でもなんで、電灯会をやめなきゃいけないの？」

「それは……ごめんなさい、聞かなかつたの。たぶん、今まで辞めていった人達と同じだと思ふわ。だいたい、想像つくもの」私は努めて優しい声でそう言つたけれど、言つた後に相手が誰かを思い直して後悔した。朗さんはただ、悲しそうに黙つている。……彼には理解できないのだ。これまで、まだ体が動くのに辞めていった会員達の退会動機が。

滅茶苦茶になつた街で、何もせず、ただヒトカゲに見つからないように身を潜めて生きるのでは気が狂つてしまう。だからせめてもの日常として、街の人はそれぞれ自分の仕事を探す。電灯会の会員は皆、ヒトカゲの駆除活動を仕事として、なんとか日常をつくつている。元は人間だつたものの駆除を

目的に生きるのは、あまりに悲しく虚しい。だから今度は、誰かを守るためとか、誰かを探すためとか、意味のある目的をつくる。その目的が達成された後は……皆ヒトカゲのように、街を彷徨う屍になつてしまふ。

朗さんは唯一、日常を求めない人だった。いつも思いつきで好き勝手な一日を過ごす。毎日この研究所跡を訪れないのも、彼だけだった。それは彼が、闇火に燃やされる前の記憶を失い、昨日の記憶も灰のようにボロボロと崩れてしまう脳をもつためかもしれない。彼にとつては、目的は短い蠟燭と同じで、一瞬のものでしかないから、あつてもなくても同じなのだ。

朗さんが、唇を引き結ぶ。五年も一緒にいて、彼のこんな顔を見たのは今日が初めてだった。

「分からないよ……」

「ごめんなさい、朗さん。……ごめんね」

誰に対しても気まぐれで、誰にでも気さくだけれど誰にも愛着を抱かない。そんな朗さんが、最初に蛍くんを見つけたのが彼だったという偶然からか、いつもの気まぐれからか、あの日から今日まで、何かと蛍くんの世話をしていた。口数の少ない蛍くんも、彼には軽口を叩く。彼が珍しく、他人に興味をもつた。珍しく、他人を気に入った。彼はもともと面倒見の良い人ではあったから、私はその程度に思っていた。彼が変わっていくことに、気づいているつもりになっていた。

私は、足を微かに震わせて俯く朗さんの背中に、手を添

えた。

「貴方は、蛍くんと一緒にいるのが楽しかったのね。蛍くんの友達だものね……」

いつの間にかこの人の日常は、この人の目的は、蛍くんと一緒にいることになつていったのだ。

「蛍」

俺が数メートル離れたところから叫ぶと、電柱に黒い影を縛り付けている縄をほどこうと苦戦していた蛍は、片手で額を拭いながら顔を上げた。俺と蛍はいつも夜に見廻りをしていないから、真昼の太陽の下で蛍を見るのはこれが初めてかもしれない。そのせいか、蛍の笑った顔が今までで一番、明るかった。

「朗さん。……俺、もう」

申し訳なさを滲ませる声を、さっぱり遮つてやった。

「由紀子さんから聞いたよ」

蛍までの数メートルが、異様に長く感じられた。真夏の真昼がこんなに暑いなんて、忘れていた。なんだか、懐かしい感覚だった。

蛍の左手から縄をひたたくつて、固い結び目をほどく。

「ありがとう」

「んん。どーいたしまして」

このヒトカゲが、巴ちゃんか。彼女は縛り付けられている間に暴れきって疲れたのか、棒立ちで俺を見上げている。正面

に立つてみると、巴ちゃんは俺が想像していたよりも背が高かった。きつと歳の近い妹だ。頭のとっぺんからつま先まで真っ黒になつてしまったその姿から、蛍の面影を探す。べた塗りの顔の中で唯一、動いている瞳。丸くて、子どもっぽい。ここは蛍に似ている。ふわふわになつちやつたセミロングも、もとは蛍と同じ、真っ直ぐな髪だったのかもしれない。

「巴。巴」

蛍の声に、巴ちゃんが目線を俺の横にずらす。喋っている人の顔を見ているんじゃないかと、音が鳴つたほうを見ているだけだと思う。俺が巴ちゃんの正面を蛍に譲ると、蛍は巴ちゃんの前でしゃがんだ。巴ちゃんの頭部が、かなり遅れて蛍を追う。

「遅くなつてごめんな、巴」

ざあ、と地面の砂を巻き上げる風が吹いた。その音にかき消されるくらい、蛍の声は小さく、優しい。

「迎えにきた。帰ろう」

これまで、探していた人がヒトカゲになつていたことが判明して、会員を辞めた人はたくさんいる。でも、辞めた人がその探していた人のヒトカゲをどうしたのか、その後どうなったのかを俺は知らない。

「声は聞こえてるかもしれないけど、言葉はたぶん理解してないよ」と、喉まで出かかった。でも、これを言つてはいけな-i-と思つた。

蛍は立ち上がり、巴ちゃんの細く真っ黒な手を握る。巴ち

やんは少し身じろぎをした程度で、あとは何も反応しなかつた。手を握り返す様子もない。けれど、蛍は妹の手の感触を記憶から呼び戻すように、何度もその手に力を込めて、感動したように「ああ」と微笑んだ。

「それ、返しにいくんでしょ」

蛍が背負う月光電灯を指さすと、蛍はその顔のまま俺に頷いた。

「持つよ」

「いいの？」

「巴ちゃん連れて歩くんじゃない、邪魔になるでしょ」

月光電灯を、蛍の肩から巴ちゃんの手を引いていない黒い右手のほうへと、ホルダーごと引き抜いてやる。

「……ありがとう。最後まで面倒見てもらつちやつたな」

「いーんだよ。俺もこの一年、結構楽しかったし。言うほど面倒じゃなかったよ」

蛍は巴ちゃんにじゃなく、俺に微笑んでくれた。その顔は、俺が知つてる蛍の顔で……俺は目を伏せて笑い返した。

あーあ、この電灯、またシール剥がさなきゃな。

朗さんがここを出てから一時間後。朗さんは、蛍くと巴ちゃんを連れてここに「戻つてきた」。

「一年間、本当にお世話になりました。急な退会になつてしまひ、ご迷惑をおかけして申し訳ありません」

さつきまで意味のない声を出していた巴ちゃんは、ぴたりと

止まり、深々と頭を下げるお兄ちゃんをじっと見つめる。もしかして、と思ったけれど、次の瞬間には片手を私のシャツの裾に伸ばしたり、通路に出ようともお兄ちゃんを叩いたりし始めた。やつぱり、自我を失つても兄妹だから特別、なんて漫画やゲームみたいなのではないようだ。

「いいのよ、そんなかしこまらなくて。蛭くん、本当によく頑張ったわ。この一年で、たぶん朗さんの三年分くらいの見廻りはしたわね」

なんて冗談を言うのと、朗さんも冗談めかしてむくれた顔をしてくれた。蛭くんがくすくす笑う。何かが抜け落ちたような、軽やかな笑顔だった。私も笑う。

「……でも、蛭くんが頑張ったのは本当よ。だからこうして、巴ちゃんが見つかったんだもの。あの日、貴方が生き残ったことには意味があったわ。……だから元氣でね。しつかり生きてね」

「はい。ありがとうございます」

蛭くんに、言葉の意味がちゃんと伝わっているかは分からない。蛭くんははっきり返答してくれているのに、彼と話していると、彼の横でもがく巴ちゃんに話しかけているような心地がした。

突き刺すような日光の中、ふらふらと真っ直ぐに歩けない巴ちゃんの手を引いて、荒れ果てた街の残骸へと消えていく蛭くん。二人の背が見えなくなるまで、私と朗さんは、地上

二階の今にも手すりが崩れそうなベランダから二人を見送った。

「ほ、た、る。……ほたる」

建物や街灯が軋む音に紛れて、微かに蛭くんの声が聞こえる。巴ちゃんは、相変わらず音には反応しているが、復唱する様子はない。

「あれってさあ、やつぱ音に反応して顔見てるだけなのかな」朗さんも同じことを考えていたようだ。どのヒトカゲを見ても、必ず考えってしまう。考えずにはいられないだろう。

「……そうだと思うわ。でも……」

「どうしても、もしかしたら言ってることが伝わってるんじゃないか、って思っちゃうよね。蛭も、そう思ってるみたいだったし」

「蛭くんに聞いたの？」

朗さんは苦い笑みを零して、首を横に振る。

「聞かないよ。たぶん巴ちゃんに声が届いてないなんて、言えないじゃん。本当のところは、誰にも分からないんだからさ」

「本当のところ？」

「俺達には、ヒトカゲが何も聞こえてなくて、何も分かかってないように見えるけど……でももし、実は聞こえてるし分かっているのに、体が思い通りに動かないだけだったら？」

お兄ちゃんの声を聞いて、必死に何か言おうとしているのに、口を、体を自由に動かせない。思っているのとは違うように、勝手に体が動く。もしも今、巴ちゃんがそうなのだとしたら

……「何も聞こえていない」「何も分かっていない」なんて言えない。

「……そうね。それに……たとえどちらであつても、今の蛍くんは、巴ちゃんと一緒にいることなんだから。目的がなくなつちやうよりは、きつと、ずつと良いわ」

「でしょ」

蛍くんと巴ちゃんの背中が、完全に見えなくなつた。

朗さんは部屋のほうを向き直り、手すりに背を預けた。

「俺、頭が燃える前の俺のことは分かんないけどさ」

朗さんのふわふわした髪が風に揺れる。

「蛍がつけてくれた名前みたいに、本当に明朗な奴だつたんじゃないかつて、思いたいんだ」

「ほ……」

「おあ」

「た……」

「あ、あ」

「……る」

「わあー、ああ！ あーっ」

「ほたる。……蛍」